

■数学としての経済学は面白いが、経済学の現実説明能力は乏しい。

それらの一連の講義を受講してわかったことで、最も重要なことは、「経済学は完全無欠に数学そのものだ」ということだ。これは、高校で教わったときも、大学の一般教養のときも印象が異なっていた。そして、宇沢先生が批判していた経済学の姿そのものだった。

講義を受けながら、二つの相反する心境の変化がもたらされた。

第一の心境の変化は、「数学としての経済学はとてつもなく面白いと感じるようになった」というもの。

第二の心境の変化は、「経済学の現実説明能力はがっかりするほど乏しいと実感するようになった」というもの。

大学院で教わったミクロ経済学は、主に集合の理論をバックボーンにしており、順序集合、位相空間、高次元の微分などを駆使する高度に抽象的な数学だった。また、マクロ経済学のほうも、微分方程式、変分法、確率過程などを縦横無尽に扱う数学だった（これらの数学用語は、本書を読むうえでは不要なので、気にしなくてよい）。

これらの数学は、数学科で挫折を経験したばかりに、再生の息吹を吹き込んでくれるに十分なものだった。数学科に在籍していたときの数学は、ひどく抽象的で、それらが何を目的にし、どんな意味を持っているのかまったくわからず、ただただ苦痛だけを味わった。

■経済学がなかなか進歩できない理由とは。

経済活動の運動法別の解明が、物質に対するそれに比べて芳しくないのは、おおまかに二つの理由がある。

第一の理由は、経済に関しては実験がままならない、ということだ。物理学や化学では、提唱された理論の正しさは実験によって確認される。同じ実験環境を再現して、同じ結果が生じるかどうかを見ることが誰にでも可能なのである。

しかし、経済の営みは原則的に歴史上一回しか起きないことばかりだ。ぴったり同じ環境を再現することはとうてい不可能である。さらには、実験が人道的に許されない場合もあるだろう。いくらその原理が知りたくても、不況や飢饉など人々を不幸にするような経済環境を故意に政策で作り出すことは許されない。この点で経済学は、物理学や化学に比べて著しく不利である。

第二の理由は、物質は観測者の意志によって行動を変えないが、人間は行動を変える、ということだ。物質は、観測者が何かの作為を行うとき、「なぜ、そんなことをするのだろう」などという詮索はしない。したがって、(量子力学の一部などの例外を除けば)観測者の意志や意図が与える影響はほとんど考慮する必要はない。

しかし、人間の経済行動を人間が観測しようとする場合、観測される側はする側の意図を推察し、それを勘定に入れて行動を変化させることがある。このような行動様式を「戦略的」という。人間は戦略的に行動するので、観測者の意志がばかにならない影響を与えてしまうのだ。例えば、巨額の損失で破綻が噂される銀行に、査察が入ったとしたら、その査察が入ったという事実によって、その銀行の株の持ち主たちは不安を抱き、株を売ろうとするだろう。こうなると、破綻は噂ではなく現実になってしまう。

このように、経済活動では、観測する側と観測される側は相互浸透をし、渾然一体となってしまうので、見いだせる運動法則はきわめて不安定なものになってしまうのである。

以上のようなことから、経済学はまだ物理学や化学ほど満足のいく応用性に富んだ成果を得ていない。本書は、このような経済の法則解明の難しさを前提とする。これを認めただけで、経済学がどんなアプローチをしているか、その初歩を解説したい。

■不況のメカニズムはわかっていない。

不況という現実注目するとき、今までの「需要・供給の原理」の議論に欠けているものはいったい何だろうか。

最も大きいのは、時間の経過の中で経済がどう動くかをきちんと定式化していないことだろう。実際、先ほどの説明では、市場が均衡価格に到達するために、「価格機構」をシグナルとして使った調整が働くこと述べたが、具体的にどんな調整が働くかは提示しなかった。実はこの点において、ミクロ経済学は現在においても明確な答えを持っていないのである。

(中略)

不況のメカニズムについては、まだ、何もわかっていないのが現状なのだ。これを解明し、解決の処方箋を発見することが、21世紀の経済学の最も大きな課題であろう。